

11月



2015年10月30日発行

セブンスデー・アドベンチスト石川教会付属 石川三育保育園

沖縄に水牛車で海を渡っていく島があることを知っておられるでしょうか。沖縄に在住の方よりも、県外から観光で訪れた方々のほうの認知度が高いのではないかと思います。私も、人づてに水牛車に乗って観光できるところが西表島にはあると聞いて知っていましたが、まさか、海を水牛車で渡って行くとは思いませんでした。その島は、由布島といいます。沖縄本島から南西に約480キロ行くと石垣島や西表島等の島が点在しています。西表島と小浜島の間にある小さな島が由布島です。今でこそ、年間20万人以上の観光客が訪れる観光地ですが、ひと昔前までは、めったに人も訪れることのない過疎の島でした。

1969年、かつてない大きな台風11号、エルシーがこの島を襲いました。それまで、何度も苦難をうつぐみ(助け合い)の心で支え合ってきた島民は、壊滅的な被害を受け、その後、一人・二人去りと残ったのはわずか老人世帯3世帯になりました。その時、残った島民の中の一人の男性が、ふと庭先にある大きく成長したココヤシに目を止めました。このココヤシは、かつて台風で流れ着いた苗を息子さんと一緒に植えておいたものでした。彼はその時、「この島をココヤシの林にできないだろうか。この島をだれでも訪れてみたくなる楽園にできないだろうか」とつぶやくのです。皮肉なもので、台風で壊滅的な被害をもたらされた島に、台風によってもたらされたココヤシの苗が新たな希望を与えるものとなったのです。

それ以来、彼はほそぼそとためたお金で1本・1本とココヤシの苗を買って、農作業の合間をみて由布島のあちらこちらを一人で開墾しては、ヤシの木を植えていきました。水は、井戸から汲み上げて、一斗缶で運んでまきました。それは、気の遠くなる作業でした。何故なら、小さい島だといっても、島の周囲は2.15km、広さが約4万坪(奥武山公園より小さい)もあるからです。ふらっとこの島と訪ねてきた島外の人々は、この姿に共感し彼の夢の手伝いをします。そして、彼らは何度も島を訪れるようになりました。しかし、元由布島の人たちは、「ほらをふいている。」とかげで笑ったのです。無理もありません。由布島全体が砂地で、植物の生育には適していなかったからです。

それでも、めげずに彼は作業を続けました。やがて、ヤシを植えて続けて10年の年月が過ぎました。彼は74歳になっていました。この時、ヤシの木は島全体をこんもり覆い、誰も目を引く光景になったのです。ここで生まれ育った彼の子供たち10人のうち6人も島に戻り、さらに夢を現実にする作業を進め、ついに「由布島植物園」を開園するに至りました。彼の夢が実現したのです。そして、多くの人々に癒しと喜びを与えています。

幾多の困難が彼を苦しめました。時には、行政から立退き勧告を受けることもありました。しかし、その都度多くの賛同者が彼に与えられ乗り越えてくることができたのです。もし、彼の夢が独りよがりのものであったとするならば、実現しなかったのではないのでしょうか。聖書のみ言葉に、「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされる場所だからである。」(ピリピ2:13)とあります。少なくとも、多くの人々の幸福のために願う夢はかなえられることを、この出来事は物語っているように思います。

園長 糸数正義